

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ごうやま りんたろう
合山 林太郎

本論文は、幕末・明治の漢文学変革期における漢詩文・漢詩人の動向を、その様々な試みを紹介しつつ詳細に描き出すとともに、漢文学が時代と切り結びながら文学史上で果たした役割について、多方面から考察し明らかにしたものである。

本論文の構成は、冒頭の「イントロダクション」に続き、第一部「幕末・明治期における漢詩の展開と達成」には、「詠物詩から見た幕末漢詩壇—大沼枕山と森春濤—」「幕末・明治期の神仙詩—森春濤の詩風の位置づけをめぐって—」等五篇（五章）の論考を、第二部「幕末・明治期の文学・社会と漢詩文」には、「漢文による歴史人物批評—幕末期における「論」について—」「明治初期漢詩結社考—旧雨社をめぐって—」等六篇の論考を、第三部「野口寧斎考」には、「野口寧斎の前半生—明治期における漢詩と小説—」「野口寧斎の後半生—明治期漢詩人の詩業と交友圏—」の二篇の論考をそれぞれ収め、末尾に「結語」を添える。

第一部では、幕末・明治の変革期の漢詩壇を代表する森春濤・槐南父子一派の作品を詳細に検討し、彼らの遊仙詩・艶体詩への傾斜、擬古表現や悲憤慷慨調の重視、あるいは詠物詩に対する批判的態度等を指摘し、その詩風の特徴を、様々な方向から初めて明らかにする。

第二部では、視野を漢詩壇から文壇・一般社会へとさらに広げ、旧雨社を例にとった漢詩結社の西洋への関心、明治十年代から二十年代にかけて漢詩を新時代にふさわしい形式に改革しようとした漢詩改良論の消長、国分青厓や野口寧斎らの時事批評漢詩・森鷗外らの小説批評漢詩等に見られる漢詩の新しい可能性への模索を具体的に紹介して、この時代の漢詩が、同時代の社会や、他ジャンルの文芸と密接に関わっていたことを明らかにする。

第三部では、明治という新時代の漢詩人の一典型として野口寧斎をとりあげ、豊富な資料に基づいて、彼の生涯を交友を中心にきめ細かく描き、また、通常の漢詩の他に、時事批評漢詩、小説批評（また小説批評漢詩）、狂詩など、彼が試みた様々な文業の意味を、時代の文脈に即して明らかにする。

従来、幕末・明治期の漢詩文研究は、時流に抗して反俗の姿勢を貫いた大沼沈山、時流に乗り新政府に近いところにいた森春濤（とその後継者の槐南）という対立の構図のもとに、漢詩壇の各派の勢力の消長を、時代の政治状況・社会状況と関わらせて論ずるものがほとんどであり、作品そのものに深く踏み込んだ研究はわずかであった。本論文は、明治期の漢詩文を考察する上でもっとも重要な存在である春濤と槐南の作品を、膨大な原資料を精査しながら精細に読み解き、その詩風を初めて明確に描き出すとともに、新しい表現、多様な表現を盛んに試みたことを明らかにした点に、きわめて大きな意義がある。また、明治期の漢詩人たちが、漢詩文を時代に即応した内容や形式へと変えようとした様々な試みが、諸資料に裏付けられて、具体的な形で明らかにされたことは、画期的な成果といえてよい。漢詩改良の種々の議論や、「評林」「韻語陽秋」「詩月旦」等の時事批評・小説批評漢詩についての的確な紹介も、今後の研究にとってきわめて有益である。今後はさらに、本論文で論じ残した本田種竹、中野逍遙等を含め、全円的な明治漢詩研究にまで広がっていくことが望まれるが、幕末・明治期の漢文学の特徴を、作品表現と社会的な意義という、微視的・巨視的の両視点から明らかにしたことは、高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。